

氏 名 卯 田 宗 平

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大甲第645号

学位授与の日付 平成15年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 漁撈技術の展開と適応に関する民俗学的研究

-生業世界における技術について-

論 文 審 査 委 員 主 査 助 教 授 安 室 知
教 授 篠 原 徹
教 授 西 本 豊 弘
教 授 湯 川 洋 司 (山 口 大 学)
教 授 大 塚 柳 太 郎 (東 京 大 学)

論文内容の要旨

本研究では、異なる三つの漁撈活動を対象とし、まず一連の漁撈活動で実践されている技術について明らかにする。その結果を踏まえ、漁撈技術の実践や運用の側面から、漁撈活動における技術の概念を提示するものである。具体的には、

- ① これまで論じられてきた技術の概念を「科学史に描かれる技術論」、「生産や生業活動のなかの技術論」の2つの側面から整理し、既往の技術論がもつ論点をまとめる。それを踏まえ、生業世界における技術の概念をまとめる。
- ② 京都府舞鶴市野原地区のサザエ磯見漁、千葉県安房郡白浜町乙浜のイセエビ刺し網漁、滋賀県近江八幡市沖島町のゴリ底曳き網漁という異なる三つの地域を対象とし、一連の漁撈活動を成り立たせている技術について明らかにする。
- ③ 漁撈活動の調査結果を踏まえ、漁撈技術の実践や運用の側面から漁撈活動における技術の概念を提示する。

従来、漁撈活動を取り扱った民俗学的な研究では、伝統的／現代的な技術を含め、漁撈技術が実際どのように運用されているのかという問題はほとんど問われることがなかった。これまでの民俗学的な研究では、各地の漁法や漁撈慣行、漁撈暦、観天望気の手法といった記録が数多く蓄積されていることはいうまでもない。しかし、その多くは当該地域の漁法や物質的な漁具を復元し、それを記録することに大きな関心が寄せられている。これらの研究では、一連の漁撈活動のなかで個々の技術がどのように組み合わせられているのかという問題を具体的に検討したものはない。また、たとえ個々の漁撈技術を採録していたとしても、漁撈活動における技術の概念をまとめたものはない。

本研究の成果は、次の三点に集約できる。

(1) 既往の技術論を整理してみると、①技術発展にともなう人間側の適応態の問題、②発揮される技術の多様性の問題、という二つの論点がある。こうした論点を踏まえ、また著者の調査成果に基づき、生業世界の技術と技能を次のように定義した。

技術とは手段とそれを操る外在化できる知識であり、技能とは経験従属的な個人固有の知識である。つまり技術とは、言語などの表現形式によって分節化できる知識に基づいて発揮される。一方、経験従属的な知識である技能は、分節化できる個々の技術を一連の生業活動のなかで統合化する働きがある。この技術と技能の関係は、一連の漁撈活動を成り立たせるために必要となり、技術がいかに発展しようとも本質的には受け継がれる関係である。

(2) 異なる三つの漁撈活動を対象とし、一連の漁撈活動を成り立たせている技術について明らかにした。

京都府舞鶴市野原の磯見漁は、岩礁地帯で長時間海上に停泊し、たえず海底を覗きながら採貝作業をする。そのため風波がでると船が岩礁に衝突する危険性が高くなる。したがって磯見漁師たちは、観天望気の情報や漁師同士で交換し、最低限の身の安全を確保している。一方、磯見漁では、海底のサザエやアワビを発見し、正確な採貝技術を持たなければ漁獲はない。とくに磯見漁師たちには、水深5～10m前後の海底にいるアワビやサザエの生態に関する知識が求められるし、それをタモやカギで正確に採貝するという身体的な技術も必要となる。磯見漁では、情報交換に基づく集団共有的な技術を踏まえながらも、個人の経験に基づく個人固有的な技術がとりわけ重要となる漁撈活動である。

千葉県安房郡白浜町乙浜のイセエビ刺し網漁では、海況に関する情報を共有し、それに基づいて実践される「集団共有的な技術」が重要な意味をもつ漁撈活動である。この刺し網漁は、水温や潮流といった漁場環境に敏感に影響を受けるイセエビを狙う。そのため漁獲を上げるには、海況に関する最新の情報が重要になるからである。とくに「両テンビン」世帯の刺し網漁師は、海女である妻から海況に関する最新の情報を取り入れ、漁場環境の変化に対応している。

滋賀県近江八幡市沖島のゴリ底曳き網漁では、ヤマアテに代表される伝統的な漁撈技術と、GPS

や魚群探知機といった現代的な漁撈技術を手がかりに、漁撈技術の発展の問題を取り上げた。底曳き網漁師たちは、新技術が導入された後、好漁場や障害物の位置の記録をGPS装置に任せている。また魚群探知機は、魚群の発見だけでなく、湖底の地形や水深の判断にも利用されている。一方、彼らは、船上での投網作業の迅速性を重視するため、ヤマアテによって底質の分布や航行進路の確認といった判断を行っている。このようにゴリ底曳き網漁における漁撈技術は、操業活動中の個々の局面に応じて相互補完的な関係で発展していることが分かった。

(3) 以上の調査結果を踏まえ、漁撈技術の実践や運用の側面から漁撈活動における技術の概念まとめた。

漁撈活動における技術とは、主体自らの経験に基づく「個人固有的な技術」とともに、集団内で交換・共有された知識に基づく「集団共有的な技術」によって成り立ち、双方をたえず統合し修正を加えながら発揮されるものである。

従来、漁撈活動を取り扱った研究では、漁撈技術がいかに実践されているのかという視点が希薄であった。また、観察調査によって漁撈活動を分析した研究では、漁獲量や漁獲能力の差を技術に対する個人差から注目している研究が多かった。しかし、一連の漁撈活動では個人の能力に依存する技術とともに、言語などによって外在化できる知識を特定の集団内で共有し、それに基づいて発揮される技術の重要性が明らかとなった。

また、漁撈技術の発展には「機械化」と「装置化」という二つの方向性からまとめることができる。ひとつは人間の身体的な動作やそれに依存した道具が発展する「機械化」の方向であり、いまひとつは人間の知覚や記憶能力が外在化し発展する「装置化」の方向である。いずれも、漁撈技術の発展によって、これまで不可能であった情報の習得と伝達が可能となり、また記録や処理が漁師個人から切り離されたところで行なえるようになった。新たな機械や装置が身近な存在として入り込むにつれ、経験により獲得された多くの知識が放棄されていくのは事実である。しかし一方、漁師たちは新たな技術を使いこなすことで所与の状況に対応した新たな技術を生み出している。漁師たちは、技術の発展を契機として、伝承のある部分を残し、ある部分を消し去り、また新たに何かを生み出すという切れ目のない営為をおこなっているのである。

論文の審査結果の要旨

本論文「漁撈技術の展開と適応に関する民俗学的研究」は、実際に漁撈活動に従事する漁業者への聞き取り調査および観察・参与調査をふまえて、生業世界において従来カンやコツとされる技術のあり方、およびそうした経験的・非明示的な技術が漁撈技術の進展とともにいかに対応・変化するかということについて考究したものである。具体的には、

- ① 既往の技術論を、科学史に描かれる技術論と生業活動のなかに示された実体的な技術論の両面から整理し、生業世界における技術のあり方について提示している。
- ② 上記の成果をふまえ、内湾（京都府舞鶴市野原地区）の磯見漁、外湾（千葉県白浜町乙浜）のエビ刺し網漁、内水面（琵琶湖沖ノ島）のゴリ底引き網漁というタイプの異なる3地域の漁撈活動を対象にして、一連の漁撈活動における技術の具体像について詳細なモノグラフを作製し、自然環境および社会経済的背景との関係を考察している。

本研究の成果は以下の3点に集約できる。

- ① 従来の民俗学研究では、漁撈技術に関する研究蓄積は大きなものがあるものの、その多くは漁撈技術に関する事例記述的なものであり、かつカンやコツとされる部分に関しては言語化されたものつまり聞き書き調査により採集可能なもののみが対象となっており、非言語的・身体的な技術まで明らかにしているとはいえなかった。こうした問題点を踏まえ、本論文では観察・参与調査により、非言語的・身体的な技術を含む技術全般に関する記録および考察をおこなっている。
- ② 具体的な漁撈活動に関する調査をふまえた上で、実際に漁撈活動を成り立たせる技術には「個人固有的な技術」と「集団共有的な技術」の両側面があることを指摘し、技術が集団内で共有化される条件について考察している。その結果、カンやコツとされる技術のなかでも因果関係を比較的明示しやすい観天望気や潮流の変化といった知識は、その一部を集団内で共有化し、実際の漁撈行為に活用する場面が多くみられること、かつそうした集団共有的な技術が自然災害および経済的なリスクを回避するのに役立つ場合があることを指摘する。主体である漁業者は自らの経験をとおして個人固有的な技術を獲得・蓄積するとともに、集団内で共有化される知識をたえず取り込むことで、漁撈に関するカンやコツとされる部分の技術を統合しながら実態としての漁撈活動をおこなってきたといえる。
- ③ ヤマアテのような伝統的な技術とGPS・魚群探知機といった現代的な技術との関係に関する検討を通じて、漁撈技術の進展とそれに対応する主体側の適応態について考察している。現代的な新技術の導入には、人間の身体的能力が発展する「機械化」（身体の外延化）の方向性と、人間の認知・記憶の能力が発展する「装置化」（認知・記憶能力の外在化）という2つの方向性があることを明らかにする。漁業者はそうした新たな技術を導入するとともに、それまで保持していたカンやコツといった伝統的な技術の一部を新技術により担わせることになるが、新技術が代替できない伝統技術が漁撈活動には必ず存在すること、また伝統技術は新技術により取って代わられるだけの存在ではなく伝統技術のほうも新技術に対応して自らあり方を変えていくこと、さらには新技術のなかにもカンやコツとして伝承される部分が新たに生み出されることが分かった。

以上のように、実際の漁撈活動を観察・参与調査により詳細に記録することで、漁業者による技術の運用面に焦点を当て、従来カンやコツと呼ばれていた部分まで包括する技術全般に関してなされた考察は、民俗学においては本論文により端緒を開かれたといつてよい。今後こうした方向での研究は漁撈技術だけにとどまらず、生業全般にも適用可能であり、民俗学における新たな技術論の地平を切り開くものと期待される。本論文に示された研究成果はその将来性も含め高く評価され、本審査委員会は提出された論文が学位論文にふさわしいものであることを認める。